

「ラーマクリシュナの福音」勉強会 第22回 (2016年1月12日)

- ・(前回からのつづき) 勉強の前のマントラについての説明

(マントラ)

Tava Kathāmṛtaṁ tapta jīvanam
Kavibhīṛitaṁ Kalmaṣāpahaṁ
Śravana mangalam Śrīmadātataṁ
Bhuvi gṛṇantiye bhūrida janāh

(サンスクリット語の読みかた)

タヴァカタームリタム タプタジーヴァナム
コヴィビリーディタム カルマシャーパハム
シュラヴァナマンガラム シュリーマダータタム
ブヴィグルナントウイエ ブーリダージャナーハ

(説明)

(1) タヴァカタームリタム (*19~21回勉強会を参照のこと)

(2) タプタジーヴァナム

- ・タプタ「熱。高熱で焼かれるような」「(熱のような) 苦しみ悲しみ」
- ・ジーヴァナム「人生、命、生活」

前回(19~21回)までの説明に付け加えて、タプタについて説明します。

●タパの直訳は「熱」です。

タパの形容詞はタプタ。

ジーヴァナは名詞なので、その前は形容詞となって、タパがタプタに変化しています。

(名詞) tāpa - (形容詞) tapta

●タパには(「シャンティ・シャンティ・シャンティ」のように)三種類あります。

①アディヤートウミカ・タパ (Ādhyatmika tāpa)

アディヤートウミカ は、名詞の アディヤートマ から来ています。

接頭辞の アディ + 名詞の アートマ で、

アートマ は「自分」「魂」「内なる自己」という意味です。

アディヤートマ が形容詞になると、接尾辞 shnika が付き ādhyatmika となりま

す。

②アディダイヴィカ・タパ (^{エディダイヴィカ}Ādhidaivika tāpa)

^{エディダイヴィカ}Ādhidaivika は、名詞の ^{アディダイヴァ}adhidaiva から来ています。

接頭辞の ^{アディ}adhi + 名詞の ^{ダイヴァ}daiva で、

^{ダイヴァ}daiva は「神」という意味です。

^{アディダイヴァ}adhidaiva が形容詞になると、接尾辞 shnika が付き ādhidaivika となります。

③アディバウティカ・タパ (^{エッディバウティカ}Ādhibhautika tāpa)

^{エディダイヴィカ}Ādhidaivika は、名詞の ^{アディブータ}adhibhuta から来ています。

接頭辞 ^{アディ}adhi + 名詞の ^{ブータ}bhutaで、

^{ブータ}bhuta は「(いろいろな) 生き物」「動物」「(自分以外の) 人間」という意味です。

^{アディブータ}adhibhuta が形容詞になると、接尾辞 shnika が付き ādhidaivika となります。

すなわち、

①は「自分」に関するタパ。

②は「神」に関するタパ。

③は「自然」(自分以外の生き物)に関するタパ。

●それぞれのタパの例

①の例。

自分の心と体にまつわるさまざまなトラブルや問題。

たとえば病気や人間関係の問題、仕事の問題、そういった苦しみの tāpa 熱です。

②の例。

ヒンドゥ教では神が自然をコントロールしていると考えます。神道も同じアイデアですね。だから洪水や地震などの自然災害は、自然の源の神にあると考えます。

そうした問題です、つまり、源が神の、苦しみの問題。

③の例。

例えば友達、親戚、隣人、仕事の上司など、自分以外の人間(生き物)が苦しみ、悲しみの源である、そうした問題です。

●三種類の中で、タパ(苦しみ悲しみ)の最大の源は、①アディヤートミカ、自分です。つねに洪水はない、つねに地震はない、つねに病気でもない。しかしつねに苦しみ悲しみはあります。

このように内省と分析をしていくと、問題の一番の源は自分の心ということがわかります。つまり自分の心がすべてのタパの源とわかります。それを「心の熱」と言っています。

●「心の熱」の原因は何でしょうか？ それは欲望です。

仏教の聖典でいう、Tanha (タンハー。パーリー語と思われる)。

サンスクリット語の Trishnā トウリッシュナー。

これらは「のど渇き」という意味です。

ですが前後関係で、それが心のレベルでのことを指し、「欲望」という意味にもなります。

たとえば、町を歩いていてお腹がすきます。するとレストランに入るという行動を起こします。次に注文します。食べます。すると満足します。

すなわち欲望があると、それを満足させなければならない。

そして満足を得るための働き・行動が始まります。

問題もそこから始まります。

欲望があっても、満足しなくなれば問題はあらわれません。

「(欲望が) 現れます、消えます、現れます、消えます」の連続ならば、問題はない。

しかし、私たちは、満足したい。

今できなければあとでもいいから満足したい。

今生で不可能ならば、来世で満足したい。

終わりがありません。

私たちはそうやって生まれ変わりを続けています。

欲望を満足させることができなければ、そこで、苦しみ悲しみがあらわれます。

満足しても、またもう一度満足したいと新たな欲望という苦しみ悲しみがあらわれます。

お金をたくさん持っていて盗まれるかもしれないと心配が生まれるように、

欲望は、苦しみ、悲しみのほかに、恐れ、失望といった問題も生じさせます。

こうして熟考していくと、私たちの感覚と行動の器官に行きあたります。

私たちには、目（見たい）、耳（聞きたい）、鼻（嗅ぎたい）、舌（食べたい）、触（さわりたい）などの感覚の器官が5つと、行動の器官（手・足・会話・生殖・排泄）が5つあります。

おもしろいたとえ話があります。

一本の棒に、ワニ、ヘビ、サル、鳥、熊を縄でしばりました。

彼らは自由になりたいと、それぞれ行動を起こします。

ワニは水を探しに、ヘビはねぐらの穴を探しに、サルはバナナの木を探しに、鳥は空に、熊はほら穴を探しにです。

目的はばらばら。

だから棒はあちこちに動いて、まったく静かにできません。

私たちの心はこの棒なのです。

感覚器官の目的がそれぞれ違うからです。

もし目の感覚と耳の感覚の目的が同じであれば、問題はない。

しかし違っているので問題が生じる。とても落ち着かない状態になっています。

なぜストレスが生まれるか？

みな同じ目的であれば問題ない。

しかし同じ目的ではないのです。

感覚の目的がそれぞればらばらであることが、私たちの心をいつも引っ張っています。

ある感覚が向こうへ、別の感覚がこちらへ。

それが理由で私たちの心はとても落ち着かない状態になっているのです。

参加者：それはすべて同時に起こっているのですか？

そうです。

街で歩くとわかります。あらゆるところから波動が入ってきます。

心の状態がどれくらい落ち着かなくなるか。また静かな状態に戻るのは大変です。

タブタジーヴァナムのひとつの大きな意味は、心がレスネス、落ち着きがない、です。

それでは心を静かに涼しくするためにはどうしたらよいでしょうか。

●心から熱（欲望。欲望からくる心の落ち着きのなさ）を取り除く方法。

それは、欲望を放棄する、ということです。

それは、「ネガティブな意味の放棄」だけではなく、神のこと、永遠のことを考えて「肯定的に放棄」する、両方です。

「外の放棄」「中の放棄」というアイデアがありますね。

出家者のためには両方必要。

家住者のためには、「物はあるがその執着はない」という中の放棄、つまり執着の放棄が必要です。

これは、一時的なものを放棄すると同時に、永遠のことも考えることをしないと難しい。

はじめに放棄して、それが安定したら、永遠のものを考える——これは不可能です。

永遠が好きになると、一時的なものはだんだん好きでなくなる。神を好きになると、世俗のことには興味なくなる——このように進むと安定した放棄が可能になります。

●では、神に対する愛を増やすには何が必要でしょうか？

それには識別が必要です。何が一時的で、何が無限か。

そして神の名前を唱える（ジャパ）、神を瞑想する、神に祈る、神聖な人びとと交わる、人の中に神を見てお世話をする、など。

こうして世俗の仕事がお世話になる。そうすると心から熱が取り除かれ、心は涼しくなっていくます。

●『ラーマクリシュナの福音』を勉強すると、なぜ心が涼しくなるのでしょうか？

マニ・マリックの例をお話します。

『福音』の中にも出てくるその方は、ブラフモー・サマージの年長の弟子で、長年からシュリー・ラーマクリシュナの元に通うお金持ちでした。

彼はビジネスを引退して一人息子にすべて任せていました。

しかしその息子が突然亡くなったのです。

息子を亡くし、ビジネスへの希望も無くした状態で火葬場で遺体を燃やしたあと、彼は家に帰ることなく、直接、ドッキネッシュョルのシュリー・ラーマクリシュナのところへ行きました。

タクールに自分の悲しみを話して、タクールもともに悲しんで、そして歌をうたってなぐさめて、やがてマニ・マリックの心は涼しくなっていました。

大変な苦しみ悲しみがいやされたのです。

マニは、「私は悲しみをいやすために、この場所に来ました」と言っていました

ヨーギン・マーのだんなさんはお金持ちでしたがたいへんな大酒のみ（ドランカー）でした。

ヨーギン・マーはそれが原因で、一時だんなさんと離れて暮らし、とても苦しみ悲しみを抱えていました。

ですが彼女もタクールのところに来ていやされました。

本人でなくてはわからない、息子亡くなりました、娘亡くなりました、だんなさんはドラッカーです、そういった状態がいかに大変か。

そしてこうした種類の悲しみは、ほかのどの場所にいてもいえることはないでしょう？

また、マスター・マハーシャヤ（Mさん）のことを考えてください。家族のトラブルで何をしたいでしたか？

参加者：自殺。

自殺したい。そう思うのは並みの苦しみではないでしょう？

どれくらいの悲しみ、どれくらいの苦しみか。

マスター・マハーシャヤはその気持ちにさいなまれてるときに、初めて、シュリー・ラーマクリシュナに会いました。

長年の在家の弟子たちはほとんどそうした苦しみ悲しみをいやすためにシュリー・ラーマクリシュナのところに来ていました。

一番の例は、ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュです。

彼は、シュリー・ラーマクリシュナに会う前の自分の苦しみがどれほどだったかを回想録に書いています。

外からはわからないが、当時のギリシュの中は、**burning** 燃えている状態でした。

ユングは人間は3つの顔を持っていると言っていますね。

① One is what I am. （本当の私）

② Another is what I want to be. （自分になりたい私）

③ One is what I want to show. （ひとに見せたい私）

そしてこれらは矛盾し合っています。

ギリシュもこの矛盾に苦しんでいました。

ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュはとても有名な俳優でした。劇場で演じます。コメディを演じるときもあります。

しかし内側は燃えている。奥さんや息子が亡くした、また訴訟問題や自分の欲望の関係で、とても苦しんでいたのです。

しかしそのおくびも見せず、「私は楽しい、私は幸せ」と演じている。

ふつうの人でもあります、自分の苦しみ悲しみを見せたくない・・・。

日本人は敏感ですから、あまりシェアしない様子です。

インド人はもっとフランクですが、バランスのことを考えたら、全部中にいれないで、ちょっと出した方がいいのではないのでしょうか。

ギリシュの問題はそれほど複雑でした。

しかしシュリー・ラーマクリシュナのところに行くと、心はやがて涼しく静かになりました。平安が戻り、幸せがあらわれました。

このように個人レベルの話はいろいろあります。

私たちも『福音』を勉強すれば、苦しみ悲しみは涼しくなります。

タバタジーヴァナムはなくなります。タバはなくなります。

(3) コヴィビリーディタム (*19~21回勉強会を参照のこと)

(4) カルマシャーパハム (*19~21回勉強会を参照のこと)

(5) シュラヴァナマンガラム (*21回勉強会を参照のこと)

- ・シュラヴァナ「聞く」
- ・マンガラム「善、良い、幸福 (welfare, wellbeing)」

(6) シュリーマダータタム

- ・シュリーマッド Śhrimat 「美しさがある」 = ^{シュリ}shri (美しい) + ^{マッド}mat (ある)
- ・アータタム ātatam 「広い」

●シュリーマッドの説明

シュリーは「美しい」。

『ラーマクリシュナの福音』はどうして美しいと言えるのでしょうか？

参加者：神様の愛について書かれているから。

参加者：Mさんの描写が美しい。

参加者：真理について書かれているから。

『ラーマクリシュナの福音』の中心はどなたですか？

参加者：タクールです

そう、シュリー・ラーマクリシュナです。だから美しいのです。

シュリー・ラーマクリシュナは体のレベルでも美しい。

心のレベルでも美しい。

話のレベルで言葉も美しい。

性格のレベルでも美しい。

シュリー・ラーマクリシュナはホーリー・マザーにこう言ったことがあります。

すべての実践が終わったあと、自分の体は Melting gold 溶かした金のように輝いていたと。それくらい美しく、liquid gold で出来たようでした。

あちこちの人がみな、シュリー・ラーマクリシュナを見たい見たいと押し寄せて、タクールは困りました。

だからマザー・カーリーに「美しさの中にかくしてください」と頼んで、そのあとその輝きはだんだんおさまった。

なぜそのように頼みましたか？

外の美しさはひとを引きつけますが、それは世俗的です。またやがて衰えますから一時的です。

シュリー・ラーマクリシュナは、霊的な人だけに来てほしかった。

外の美しさに関心されて来る人と、中の美しさに関心されて来る人とを、シュリー・ラーマクリシュナは区別したかったのでそのように祈りました。

ですが外の美しさがなくなったあとでも、サマーディに入るとどうでしたか？

シュリー・ラーマクリシュナがサマーディの中で歌って踊るとき、体はとても美しく変化しました。

体は美しく、中には

- ①美しさ **beauty**
- ②甘さ **sweetness**
- ③親切 **kindness**
- ④愛 **love**
- ⑤慈悲 **compassion**
- ⑥清らかさ **Purity**
- ⑦神聖さ **holiness**

これらが「凝縮して」あった。It's Shri Ramakrishna.

Mさんは「もっと見たい」I wanted to see more and more and more. I'm not in satisfaction.
——『福音』の中にその描写がありましたね。まばたきせずに見たい。

シュリー・クリシュナを慕うゴープー達も、シュリー・クリシュナの美しさをまばたきせずに見たかった。

想像してください、それがどれほどの美しさか。

普通の美しい人は外が美しいだけ。中に **sweetness** も **compassion** も **love** も **purity** もなし。たとえば祭壇のシュリー・ラーマクリシュナの写真をどけて、美しい俳優や若者の写真を置いてみたと思ってください。どのくらいの時間、私たちはそれを見たいと思うでしょうか。きっと、ある時は見たくなってもある時は見たくない。

しかしラーマクリシュナの写真は長い間見ても、まったく反動は出ないです。

なぜか？

シュリー・ラーマクリシュナの、外は写真という形ですが、中は無限だからです。

シュリー・ラーマクリシュナの写真は無限 **Infinity** のシンボルです。infinity, pure, love, compassion のシンボルですから、何も反動が出ないのです。

普通の美しい人は反動が出ます。たとえば、やがて見たくなくなるとか、また別の美しさを見たいと欲しがるとか。

シュリー・ラーマクリシュナの性格については説明はいらないですね、性格がどれくらいスピリチュアルか、皆さん知っています。

また、シュリー・ラーマクリシュナの会話も、とても面白くないですか？

ジョーク、からかい、例え話、物語。

そうした会話がなぜ面白い、つまり美しいのか。

慈悲、普遍的な愛、自分の悟り、それがバックグラウンドだからです。

普通の会話上手な人は、話が終われば残るものは何もない。話を聞いた人に性格が良くなる可能性全然ないです。

なぜならその人のバックグラウンドに、普遍的な慈悲、愛、純粹さ、悟りはありませんから。

しかしシュリー・ラーマクリシュナはそうした源から会話が出ています。

だから美しく面白いのです。

だから私たちが『福音』を読むと、性格が変化する可能性があるのです。

●アータタムの説明。

・ **ātatam** の意味は「広い」 **wide** です。

どれくらい広いでしょう？

それは、どこまでも続く「空」のように広い。

シュリー・ラーマクリシュナの美しさは空のよう。

永遠のよう。

なくならない美しさ。

あるときはあり、あるときはない、というものではない。

永遠な美しさ。

広がっている美しさ。

延々と広がってなくなりません、『福音』の美しさはなくならない。

それだけでなく、探さなくてもいつでもどこでもある「風」のように、シュリー・ラーマクリシュナの美しさは探す必要もありません。

『福音』だけ読めば、その美しさをすべて経験できます。

(7) ブヴィグルナントウイエ ブーリダージャーハ

(5) で見たように、

「シュラヴァナマンガラム」すなわち「それを聞くと幸福を得ることができる」としても、

(6) で見たように、

「シュリーマダータタム」どんなに美しくても、

すべての人がそれを好きになる可能性はないかもしれません。

例えば「ニガウリは体に良いが、苦いから好きではない」というように。

どうしてすべての人が『ラーマクリシュナの福音』を読んでいないのでしょうか？

参加者：(本が厚くて) 重いから。(笑い)

(7) にその説明があります。

- ・ブヴィ「世界に」
- ・グルナントウイエ「褒める」
- ・ジャーハ「人」
- ・ブリダ「たくさん」

ブーリダージャーハ、つまり「たくさん物や寄付をした人」が、『福音』をととても褒めています。

「たくさん寄付をあげた人」と『福音』、どんな関係があると思いますか？

ヒンドゥ教には、**As the result of charity the gift is lot of merit.** というアイデアがあります。

参加者：自分が寄付をすることでメリットをもらうってことですか？

はい。

自分が寄付をすることで、天国へ行くという恩恵にさ^{メリット}ずかる。
寄付をあげると、善を与えられる。恩恵を受ける。

参加者：自分が慈善をすると神様の恩恵をもらえるわけですよね？

そうです。

本当は、人は、今生や前世でした慈善の結果で『ラマクリシュナの福音』を好きになるのです。

ラマクリシュナと同じような聖者のひとを好きになるのです。

善をなした人だけが好きになります。

善をなさない人、世俗的な人は、好きにはなりません。

参加者：神様の恩恵によってラマクリシュナの福音を読むことができるのですよね？

そうです。Grace of God 神様の恩寵です。

参加者：その「寄付」っていうのは、私たちには「お金」のイメージが強いですが。お金というより「良い行い」ということですか？

良い行いだけではなく、良い人だけではなく。

ほかの人びとを助けるいろいろな「お世話」「奉仕」というアイデアが入っています。

前世や今生で良いカルマをすると、その結果で『ラマクリシュナの福音』を好きになります。

参加者：読むだけではなくて、好きになるということですか？

読みます、すると好きになります。

参加者：ですが読みっぱなしの人もいます。

このポイントはどういう理由で好きになるか、ということです。結果はまた別の話です。最初は、好きにならないと読めないですね。全然勉強しないですね。

参加者：読もうと思わないのは慈善活動をしてないからですか？

それは別のことです。しかし、何も良いカルマをせずに『ラマクリシュナの福音』を好きにはなりません。世俗的な人、利己的な人は、好きにはなりません。

ある人は『ラマクリシュナの福音』を人の紹介で読み始めました。

ある人はインターネットで、ある人は協会に来て知りました。

しかし『ラマクリシュナの福音』を読んだ本当の原因は外の原因ではない。

自分の良いカルマです。

「良いカルマによって恩恵を得る」という考えはとても良いです。

カルマの法則というと「運命論」といった否定的なイメージが多く、信者の中にも、今の苦しみ悲しみは前世からの悪いカルマの結果だという考えが多く見受けられます。

ですから、良いカルマの結果で今生、『ラーマクリシュナの福音』を読むことができたと感じることは、とても肯定的な良い気づきです。

ブヴィグルナントゥイエ ブーリダージャーハ、これはとても肯定的です。

普通の人には、『ラーマクリシュナの福音』のことを聞いても、紹介されても読みません。

本棚に置いてあるだけ。1ページ、2ページ読んで、もう終わり。

参加者：良いカルマをすると、そんなに大きな結果をもらえるってことを、学校とかで教えてもらっていたらよかったなと思います。

そうですね。

もうひとつ。

今から良いカルマをすると、後でもっと良い結果が出ます。

それはとても論理的です。

責任は自分の責任です。

自分のカルマで苦しみ、良いカルマで絶対に良い結果が出る。

責任は他にはない、自分ですから。

(『福音』勉強会第22回、以上)